

人口学の発展における国勢調査の歴史的役割

Historical Roles of the Population Census in the Development of Demography

川崎 茂 (日本大学経済学部)

Shigeru Kawasaki (Nihon University)

kawasaki.shigeru@nihon-u.ac.jp

日本の国勢調査は、大正9年(1920年)に第1回の調査が行われて以来、ほぼ5年ごとに実施され、今年の調査で100周年を迎える。この報告では、企画セッションの導入に当たり、日本の国勢調査が人口学の発展に果たしてきた役割を概観し、今日におけるその意義を考察する。

国勢調査は、人口分析における最も基本的な統計情報源として、人口学において広く活用されている。日本では国勢調査以前、戸籍の情報に基づく統計が公表されていたが、国勢調査に基づく統計に比べて、詳細な属性別の集計結果は得られず、また、統計の精度が低かった。このため、当時は、今日行われているような人口分析を行うのは困難だった。

このことは、例えば我が国における生命表の改善・発達の過程から読み取ることができる。明治45年(1912年)、国が初めて公表した生命表では、分母人口が戸籍に基づく人口であったため、得られた数字は精度が低かった。しかし、昭和5年(1930年)に公表された第4回生命表からは国勢調査人口が利用可能となり、精度が向上した。

第1回国勢調査が実施されて以降、従前よりも詳細な統計表が公表されるようになったが、当時の集計能力の制約から、公表される統計表がすぐに大幅に拡充されたわけではなかった。しかし、戦後には電子計算機の導入により、公表される集計表が大幅に拡充され、様々な人口分析が可能となった。近年では、公的統計の二次利用制度により、人口分析にマイクロデータも使用されるようになっている。

このように、大正9年に開始された国勢調査は、人口分析の基礎資料が質・量の両面で充実し、これによって人口学の発達を支えてきた。

今日では、国勢調査の結果は広く利用されるようになった半面、調査の実施をめぐる環境は極めて難しくなっており、正確かつ円滑な国勢調査の実施は世界各国共通の課題となっている。国勢調査が今後とも人口学の発展を的確に支えることができるよう、新たな調査方法等を活用し、国民の理解を得て円滑に調査が実施される必要がある。